

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑬

玄奘の入竺

訳経史において、鳩摩羅什とともに特別な地位を与えられているのが玄奘である。訳経史では玄奘より前の時代を旧訳、玄奘以降は新訳と区分されている。鳩摩羅什が用いた仏教語は漢字仏教圏において未だに多く踏襲されており、その質において彼の功績は偉大であったが、玄奘が訳出した数は鳩摩羅什の4倍にもものぼり、量においては群を抜いている。この二人の訳経を比較することによって、訳経史を伝道の視点から概観していきたい。

鳩摩羅什が訳出した仏典は、『法華経』や『般若経』など、主に初期大乘仏教のもので、より実践的な信仰を中心とする仏教を伝える上で有用であった。当時の中国においてはそれが伝道に効果的であり、その漢訳によって時代に適した教理解が浸透したと考えられる。その後、隋の時代に入ると「如来蔵」や「唯識」等、より思想的色彩の強い中期大乘仏教が主流となり、次第にその教学研究の必要性が認識されるようになった。そのような仏教思想の過渡期に誕生したのが玄奘である。

生家の窮乏が理由で幼少期に出家した玄奘は、11歳の頃には『法華経』や『維摩経』を自由に暗誦し、15歳からは本格的に教学を学び、その才能を開花させると、『攝大乘論』を学び、中期大乘の唯識を中心とした哲学理論に興味を持つようになった。その後、中国各地で高僧に師事し教学を修めたが、自身の研究に行き詰まり、次第に彼は漢訳仏典を通してではなく、天竺で直接原典にあたり教学の蘊奥を究めようとするようになった(桑山・袴谷,1981:193)。求法の旅を決断した背景には、当時の漢訳仏典に対する信頼の欠如と、仏典相互の齟齬による教理解釈の疑義があったと考えられる。特に彼が求めていたのは、アーラヤ識など瑜伽行派独自の概念を論証した唯識の重要な典籍『十七地論(瑜伽師地論)』の完全なる原典であった。627年、26歳になった彼は天竺に向けて求法の旅に出た。当時は政情不安な西域への出国には公的許可が必要で、再三の請願にも拘らず、その許可を得ることができなかった。そこで彼は飢饉や水害の混乱に乗じ、国禁を犯して旅立った。『慈恩伝』巻五には、所聞をもって帰還し、翻訳することを目的としていた旨が記されており、当初から帰国後の漢訳を目的としていたことがわかる。身命を賭して求法の旅を志した彼の姿に、教学に対する学問的良心と仏法に対する篤信が感じられる。

玄奘以前にも多くの漢人僧が天竺を訪れていた。中でもよく知られているのが東晋の法顕である。彼は中国における律蔵の欠如を嘆き、それを求めて399年に長安を出発し、パミール高原を超えてインドに入り、スリランカを経て海路で帰国した。彼はその旅の記録を『仏国記』に記した。各地の詳細な記録は、年代記録が曖昧なインド史を知る上で貴重な資料となっている。玄奘は法顕の入竺からもかなり刺激を受けていたようだが、多くの同行者とともにインドを目指した法顕とは違い、玄奘の旅は基本的には単独行動であり、より困難かつ危険であったに違いない。ただ、法顕は晩年に出発しているが、玄奘は26歳という肉体的にも充実した年齢で出発しており、上述の記録か

らしても、彼は自身の体力と知力を勘案し、語学習得、行路の選定、帰国後の訳経など様々な点を熟慮して計画的に実行したように見受けられる。

玄奘は長安を出発し、艱難辛苦の砂漠の旅を続け、盗賊に遭遇するなど多くの危機を乗り越え、途中の高昌国などでは国王の厚遇を受けつつ、サマルカンド、バーミヤンを経てヒンドゥークシュ山脈を越え、ガンダーラとカシミールに滞在し、釈迦ゆかりの地を回った後、仏教教理の一大研究拠点であったナーランダー大学にたどり着いた。当時のナーランダーは最大規模の最高学府であり、学徒の数も数千人であった。ナーランダーでは主に唯識と中観の大乘教学の研究が行われていたが、諸派の仏教学やヴェーダ学、医学、数学など、その他の学問研究も行われていた。玄奘はまず瑜伽唯識の大家として高名なシーラバドラ法師から念願であった『瑜伽師地論』の講義を15カ月受けて修得した。玄奘は5年間にわたりナーランダーに滞在し、仏教教理のみならず、ヴェーダ学に関しても相当の知識を得た。おそらくその過程で彼はサンスクリット語の精緻な文法や語根に関する鋭い感性を体得したのではないか。この経験は帰国後の漢訳の際、サンスクリット語原文の理解と、語義に忠実な訳語の選定に遺憾なく発揮されたと思われる。その後、インド半島をめぐる、各地で入手した多くの仏典を携えて帰国の途に就いた。玄奘は17年間にわたり求法の旅を続け、645年によく長安に帰還し、六五七部もの仏典を持ち帰った(桑山・袴谷,1981:244)。

帰国後、玄奘は洛陽にて唐の太宗皇帝に拝謁した。太宗は玄奘の博識と人格に感化され、還俗して自身の政務を補佐するよう勧めたが、玄奘は漢訳に生涯を捧げる覚悟を述べて固辞した。そこで太宗は玄奘に弘福寺をあてがい、漢訳協力者として全国から優秀な碩学を集め、玄奘の漢訳を勅命の国家事業として支援した(桑山・袴谷,1981:295)。玄奘は太宗から天竺や西域の見聞を再三求められたので、『大唐西域記』としてまとめて上奏した。法顕の『仏国記』と並び、この『大唐西域記』も当時の中央アジアやインドの宗教、文化、歴史を知る上で貴重な研究資料となっている。北インドやネパールでは今もなお、その記述をもとに仏教遺跡の発掘調査が行われている。後世、玄奘の旅は『西遊記』として小説化され人気を博したが、それも玄奘の偉業が多くの人に賞讃された証であろう。

外来の教えであった仏教が、西域からの渡来僧による漢訳によって次第に漢人社会に広まり、その教えに感化された漢人出家者らが求法のために身命を擲つほど、彼らの信仰は深まっていった。玄奘は当時の中国における仏教に物足りなさを感じて入竺したが、物足りないと感じるまで成熟した漢人仏教者が現れる段階に至り、中国における仏教はもはや外来の教えではなく、中国仏教としてその独自性を確立する段階に到達したとも考えられる。玄奘が帰還し、漢人が直接原典に触れて原文に忠実な漢訳を施す漢人主導の訳経がいよいよ始まった。

[引用文献]

桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』大蔵出版、1981年。